

〈研究ノート〉

北海道近代史と「開基」意識

桑 原 真 人

現在、北海道の各市町村では自治体史の編さんが盛んであるが、その場合の問題点の一つとして、最近急速に浮上しつつあるのがいわゆる「開基」問題である。

そこで、まず最初に、「開基」の意味を確認することから始めたい。岩波書店の『広辞苑』第4版(1993年)によれば、「開基」には、

- ①物事のもといを開くこと。
- ②寺院また宗派を創立すること。また、その僧。開山。開祖。
- ③寺院創建の際、経済面を負担する世俗の信者。この意味では開山と対になる。

という三者の説明がなされている。このうち、②と③はともに寺院の創建、建立に関わる意味においてであるから、これを整理すれば、①の「物事のもといを開くこと」と、②、③の宗教的意味あいの両者となる。おそらく「内地」(現在でも、北海道では、津軽海峡以南の「日本」——この場合、本州・九州・四国の三島を指し、おそらく沖縄はニュアンス的に含まれていない——をこのように呼んで区別しているが)では、後者の意味に使用する場合がほとんどではないだろうか。ところが、北海道では、この「開基」を、①の意味で用いるのが一般的である。たとえば、〇〇町の「開基50年」、「開基100年」といった具合にである。これは、言いかえれば「開拓50年」、「開拓100年」ということであり、要するに、近代になってからの「和人」(北海道史研究においては、前近代からの蝦夷地——北海道へ

の「日本人」植民者をこのように表記する慣行がある)による移住・開拓の歴史が、北海道近代史の、いや北海道史のすべてである、といった歴史認識を端的に示すものとして(このような意識を、私は「開基」意識と呼ぶこととする)、日常的に使用され続けているのである。その例を次に示そう。

1993年1月20日付の『北海道新聞』は、「来年『開基100年』を迎える秩父別町／“開拓の音、響く町に／2.8トンの洋鐘備えた塔建設へ」との見出しのもとに、「平成6年に『開基100年』を迎える空知管内秩父別町は今春、重量が2.8トンのある国内最大級の洋鐘を備えた高さ33メートルの100年記念塔の建設に着手する。秋には完成の予定で、同町開拓期に響きわたった「屯田兵の鐘」のように、町のシンボルとして、町内に時を告げる」と、このように報じている。ほぼ同趣旨の記事が、やはり「開拓100年記念ブロンズの鐘／秩父別に建設計画」という見出しで、1月26日付の『朝日新聞』ほっかいどう欄にも掲載されている。

ところで「開基100年」や「100年記念塔」といえば、直ちに想起されるのは、1968年9月、1869年の開拓使設置以来100年を記念して北海道が中心となって盛大に実施した「北海道100年」記念祝典であり、また同記念事業の一環として、札幌市郊外の野幌原始林の一角に建設された「北海道100年記念塔」であろう。

この「北海道100年」の基本的性格については、かつて取りあげたことがあるのでそれを

参照していただきたいが（『歴史評論』第222号、1969年2月）、いま当時の新聞をめくってみると、「風雪100年 輝く未来」をテーマスローガンとして実施されたこの記念式典に、おおむね好意的な姿勢の報道に終始しており、この「北海道100年」史観の裏側に存在する問題点、即ち、和入による開拓100年によって否定されたその前史の主人公である、先住民族アイヌの歴史をどう考えるか、という点はまったく無視されている（なお、このような「北海道100年」的発想は、北海道の歴史を明治維新以降の一世紀としてのみ把握しようとするのあまり、同じ和入による道南地方の中世・近世の「開拓」にも目をつぶるという皮肉な結果を招いている）。

だが、この「北海道100年」や「北海道100年記念塔」の問題は、アイヌ民族の立場からみれば、その評価は一変する。かつて戸塚美波子は、「1973年ある日ある時に」（『北方文芸』第6巻第7号、1973年7月）で、

エゾの真夜中

ノッポロに立つ ノッポの足元で
ワイワイガヤガヤ
6人のアイヌとシャモが 入り乱れて
騒いで居た
6人は 目いっぱい 背いっぱい
精いっぱい ノッポを見上げた

（以下略）

と「ノッポロ」の「ノッポ」＝「100年記念塔」を戯画した。さらに結城庄司は、その著『アイヌ宣言』（三一書房、1980年）において、「北海道100年祭」は、「アイヌ民族の文化と歴史」がすべて無視された「侵略100年祭」であると断言したうえで、「日本人にしてみれば、開道あるいは開拓100年という国家の行事に感慨深いものがあつたであろう。だが、アイヌ民族にしてみれば、「侵略100年」記念祭を観る思いであつた。開道100年とはどのようなことであつたのかを略述しなければならない」

（67頁）と述べている。そして、1869年7月の開拓使設置を起点とする明治政府の北海道開拓政策を概観しながら、次のように言う。

一方アイヌ民族は、日本の侵略支配によって自然資源の活路を失い、和入による強制移住のため各地で住みなれた土地を奪われ、生活の場を追われることとなり、路頭に迷う結果となり、難民化していったのである。北海道の開拓がおよぼした民族への影響はこの時代に根本的なアイヌ問題を現在にまで残して来た（68頁）。

以上みてきたように、和入からみた「北海道100年」は、アイヌ民族の立場からみれば、「侵略100年」なのであり、したがって「開基100年」、「創建100年」を強調することは、北海道の地域史を、一方的に和入の開拓史としてしか扱えない立場に結びつくものといえる。こうした「開拓史観」や「開基」意識に対し、アイヌ民族の側から批判の声があがるのは、いわば必然であつたといえる。

最近の事例をみても、25年前に「北海道100年」を実施した北海道自身が、再び1886年に設置された北海道庁の本庁舎（1888年に完成し、「赤レンガ」と呼ばれている）落成100年を記念する「赤レンガ百年祭」を、1988年6月から2カ月間開催しようとして、アイヌ民族の有志から「先住民族の歴史を無視している」と厳しく批判された問題を皮切りに（『北海道新聞』1988年2月18日、20日、26日付、『朝日新聞』1988年6月26日付などを参照。なお、この問題の発端は、行事を企画した北海道側の文書に、「北海道開拓の拠点としての『赤れんが庁舎』とあり、「道民のこれまでの100年（中略）を考えるまたとない契機」とその意図が述べられていたためである）、1989年8月には、「釧路市開基120年記念式典」問題（『北海道新聞』1989年8月1日付）、1992年1月には、旭川市の「開基100年」事業問題（『朝日新聞』1992年1月18日付）が相次いで表面化した。さらに昨年2月には、1月30日

に帯広市で開かれた北海道ウタリ協会主催の第5回アイヌ民族文化祭をめぐって、この「文化祭を帯広開基110周年の協賛行事にしてほしい」と帯広市側がウタリ協会側に打診し、拒否されていたことが明るみに出た（『北海道新聞』1993年2月3日付）。

その理由について北海道ウタリ協会の秋辺（成田）得平理事は、「われわれからみれば『開基110周年』という言葉自体、それまでのアイヌ民族の歴史を無視したもの」（同上紙）と述べているが、この点について秋辺は、より具体的に次のように論じている。

北海道212市町村あちこちで、例えば（釧路市の一引用者）隣町の厚岸町も開基190年とかやっているわけでして、これは釧路の例をみるまでもなく、開基という言い方は明らかに和人の一方的な考え方、一方的な基準だということで、まるでそれ以前にアイヌがいなかったみたいになってしまいうわけです。だいたい北海道外では、市町村単位で自分のところの開基なんてことを、やる所はほとんどないわけでして、まさに北海道100年、開道100年という事業があるいは開道50年もありましたけども、そこらへんが発端になって行って、行政上、道がやるからおらっち市町村もやるかということで、非常に安易にやっている。それを郷土史を研究している人達などにいろいろ資料を提出させては、少しむりやりにそういう起源を作ったり、発祥の地を作ったりという作業をしている。まさにアイヌ無視なわけでして、こんなことはもうこれからの時代は通用しないわけです。

（成田得平「クナシリ・メナシ戦争200年とアイヌ民族の権利」、根室シンポジウム実行委員会編『37本のイナウ——寛政アイヌの蜂起200年』（北海道出版企画センター、1990年）所収）

やや引用が長くなったが、秋辺の以上のような主張のなかに、「開基」問題に対するアイ

ヌ民族の立場が明示されているといえよう。

こうした流れのなかで、北海道による「赤レンガ100年祭」はその計画の全面修正を余儀なくされ、釧路市の「開基120年式典」は、「式典の式辞で、①開基の年を明治3年としない、②佐野孫右衛門（釧路場所の請負人で、明治3年=1870年に秋田、青森等からの移民を募集、定着させた功労者で、この年が釧路の「開基」とされる一引用者）に触れない、③アイヌに対する感謝の言葉を入れる」の3点で北海道ウタリ協会釧路支部と「合意」した（『北海道新聞』、1989年8月1日付）。また旭川市の場合も、市が石狩川河川敷に造成した「旭川市開基100年記念河川公園」を「リベライン旭川パーク」と変更せざるを得なくなったのであるが、その陰には、「旭川開基100年」に反対する市内在住のアイヌ民族有志や、旭川北都商業高校教職員組合の運動が存在していたのである（『朝日新聞』1992年1月18日付）。

そこで、以下「旭川開基100年」問題について、やや詳しく取りあげてみたい。旭川市の「開基」とは、1890年9月20日、北海道庁令により「石狩国上川郡に旭川、神居、永山の三村を置く」と定められたことに起因する。ただし、この場合、和人移住者によって開拓され、一定の地域社会が形成されていたという意味ではない。先住のアイヌ民族を除けば、和人移住者は皆無といってもよい状況であり、いわば北海道庁の公文書の中のみ存在する、実態の無い「村」であった。事実、屯田兵村としての永山村に始めて屯田兵が足を踏み入れたのは、翌91年7月のことである。

このこと一つを取りあげてみても、旭川市の開基の根拠は極めて薄弱といわねばならないが、市側は、1990年9月20日に「開基100年記念式典」を実施し、あわせて「旭川のあゆみ展」を市内のデパートで開催した。

ところで、この「あゆみ展」を企画した旭川市教育委員会は、当初「旭川100年のあゆみ展」とする予定であった。しかし、8月17日

の市議会開基100年記念事業特別委員会で「100年という言葉が入っては、それ以前のアイヌの人々のいとなみを消すことにならないか。アイヌの人々と話し合うべきだ」との指摘を受け、その結果、アイヌの人々から「100年」という言葉に「不快感」が示され、展示の名称から「〇〇年」を削除する、といういきさつがあった（『北海道新聞』旭川版、1990年8月23日付）。

それと同時に問題となったのが、「開基100年」記念事業として旭川市が建設を計画した「100年記念ホール」（仮称）の名称募集であった。市側は、市民をはじめ小、中、高校にも呼びかけてその公募を行ったが、7月2日、名称募集の文書を生徒に配布しようとした旭川北部商業高校では、教職員組合からこの「開基100年」事業に対する疑義が表明された。そして、とりあえず文書の配布を保留すると共に、7月10日職員会議を開き、「学校としてアイヌ問題を考える視点を明確にした文書」を作成し、それを市開基100年事業推進本部の文書と共に生徒に配布すること、文案は、社会科担当教員が作成すること、などを確認した（高教組旭川北都商業高校教職員組合・中井伸雄「アイヌ・少数民族問題と教師の役割—「旭川開基100年」記念ホール名称募集に関わる問題—」〔1990年11月の合同教育研究全道集会レジュメ〕、以下の引用も同様）。

ところが7月17日、同校社会科教員の作成した「100年記念ホールの名称を考える前に」という文書に対して、管理職の校長は、「社会科の原案」は「極めて政治的」であり、偏った見方であるから配付できない」と非難し、その書き換えを指示するという事件が起きたのである。その文書は、〈北海道の先住民族〉、〈和人が移住してきて……〉、〈今問われていること〉の三部から構成されているが、たとえば〈和人が移住してきて……〉の部分には、次のような叙述がある。「江戸時代頃から、和人の移住や侵略が進み、明治時代以降はそれ

が更に徹底されました。そしてアイヌ民族は、生活の手段であった狩猟・採集・漁労の大幅な制限や廃止、そして何よりも土地を奪取されたことにより、アイヌ民族の生活基盤は破壊されていったのです。（中略）アイヌ民族からみたら、この100年間は正に和人による侵略の100年間に他ならないのです」（傍点は筆者）と。

この中で学校側が、「一方的な文章である」、「私見がまざっている」、「開基100年を否定することになる」、「事実であっても生徒に教える必要がないことである」といった理由を列挙して、文章の書き換えを求めたのは、主として傍点の部分であるが、このような表現が、学校側の主張するように「極めて政治的」で「偏った見方」といいうるか、大きな疑問を招いた。

同校内部では、この事件を契機に「アイヌ問題についての本質討議」が行われ、学校側と組合側は、問題の文書を再度「手直し」して生徒に配布することで「妥協」した。しかし、北都商業高校教職員組合は、高教組旭川支部と連携しながら旭川市教育委員会、旭川市開基100年記念事業推進本部に「要請書」を送り、この旭川の「開基100年」事業を契機に、先住民族である「アイヌ民族について正しい理解がなされるような教育的配慮が求められている」こと、その教育的実践を札幌市にならって「旭川市としても早急に検討」することを要請した。

こうした高教組旭川支部を中心とする一連の抗議行動によって、旭川市側に「開基100年」問題に対する「一定程度の配慮」を確約させ、「旭川のあゆみ展」から「100年」を削除させるなどの成果をあげたのである。

以上、最近の北海道における自治体の「開基」問題を取りあげながら、実はこの問題が、北海道史、北海道近代史をどのように把握するかという、いわば道民の歴史認識に大きく関わっていることを明らかにしてきた。この点については、私の近著『戦前期北海道の史

的研究』（北大図書刊行会，1993年）第4編においても詳しく取りあげているので，関心のある方は是非とも参照していただきたい。

なお，北海道ウタリ協会などによってこの「開基」問題がクローズアップされるとともに（『毎日新聞』1991年8月4日付），自治体の一部には，「開基」にかわって，「創基」や「創建」の語を用いようとする風潮があると

聞かすが，こうした言い換えのみでは，この「開基」問題の解決が困難なことは，あらためて指摘するまでもないであろう。

[付記：本稿は，もともと「北海道の歴史は誰が作ったか」という題名でグループまげい編『まげい』第11号（1993年7月発行）に掲載したものであるが，このたび改題のうえ，若干の加筆・訂正を加えて発表することとした。]